

フランス語の指小接尾辞 -ot(te)について

安達万里子 博士前期課程2年

0. 目 的

フランス語において、指小接尾辞による新語の造成は制限されてきており、多くの指小接尾辞は既にその生産性を失っている。その中で接尾辞 -ot(te) は、-et(te) の変異体のような価値を持ち、現在なお辛うじて生産力を持つ。しかし語源的に同根とはいえ、隣国イタリアで -otto 接尾辞と -etto 接尾辞が明らかに異なる機能を持つことを考えると、-ot(te) を -et(te) の変異体として位置づけるのは不思議である。ここでは、-ot(te) 接尾辞が、イタリア語接尾辞 -otto とは異なる背景を持つことを考慮に入れながら、その使用の条件を探り、-et(te) と -ot(te) の差を明らかにしたい。

1. 指小辞とは、指小接尾辞とはなにか？

1.1. 変意における指小辞の位置

接尾辞派生は、新しい語彙単位を生み、文法範疇を変えることも可能である。その接尾辞派生の過程における「品詞クラスの変わらない、言語の実質の変化」⁽¹⁾ を変意と呼ぶ。例えば、接尾辞派生の中で、単純語に「大きい、小さい、可愛い」などの意味を付与した新語、すなわち変意辞をつくることは、変意である。その中でも単純語の記号内容の縮小が行われる場合を指小変意と呼び、それによって出来た新語を指小辞、そのために使われる接尾辞（多くの場合派生接尾辞としての機能を併せ持つ）を指小接尾辞と呼んでいる。

例：（名詞または、名詞幹に接尾辞を付加した場合）

maisonnette 「メゾネット、小さな家」 < 単純語 maison 「家」 + 指小接尾辞 -ette （動詞幹に接尾辞を付加した場合）

vivoter「細々と生活する」＜単純語 vivre「生活する、生きる」の語幹 -viv- + 指小接尾辞 -ot + -er

指小変意は、大きさの縮小のみをもたらし新語造成法ではない。[WEBER]⁽²⁾の引用した辞書の殆ど全ての定義⁽³⁾が、この変意を「単純語への接尾辞付加によって指示事項の客観的・物理的（この場合は指小辞なので）縮小」と／または、肯定的または否定的な、主観による価値・陰影の評価の変化」としている。この伝統的解釈のとおり、概念の縮小という客観的評価と主観的評価とは組み合わせの形で現れるので、指小辞の評価は、指小貶下辞であったり、指小親愛辞だったりする。[WEBER] p.99 の注 144.によれば、

「仏語に於ける指小変意は、少なくとも一般に認められた語用の中では、辛うじて生き延びているだけだ。仏語に於ける指小変意は、特に、その自発性を欠いている。指小変意というものがなんとか可能なのは、少なくとも言語の周辺部分においてである。」

つまり、仏語では、書き言葉などの公の場所において、話者は、自分の好きなように指小辞を作ることができない、ということだ。フランス語が、変意による新語造成を時が経つにつれて著しく制限・縮小していることは DUBOIS⁽⁴⁾、WARTBURG⁽⁵⁾によっても裏付けられる。実際「小さな、可愛い」という含意を示す場合、仏語では分析的に petit + N. の形で表せることがよく知られており（例：mon petit bonhomme「僕の可愛い坊や」）、表現力において他のロマンス語における指小辞のそれに劣らない。したがって、新語造成そのものに消極的なフランス語で、変意辞の造成が抑制されているのは当然と言える。この意見に対し、[HASSELROT]⁽⁶⁾ Nouveau Petit Larousse の調査を根拠として、仏語における変意が現在も行われていることを、辞書の新しい見出し語化という公に認められた形で確認されるとしている。しかし、辞書に記載される変意辞は、多くの場合、語彙化した指示内容を持ったものである。そこには[WARTBURG]のいう“自発性”が認められない。ただし、かつてのフランスが指小接尾辞による指小辞をかなり自由に作っていたことは、同じ[DUBOIS] p.6で認められているし、現在語彙化した指小辞の数からも伺える。

1.2. 指小辞と語彙化した指小辞

指小辞の中には、歴史的に見ると（通時的観点からは）確かに変意で出来た新語だったのだが、現在の用法では（共時的観点からは）、完全に元の語とのつながりを絶たれたように感ぜられるものがある。

元の語が消滅してしまって独立したもの

例：alouette「ヒバリ」＜古仏語 *aloue* + *-ette*＜ラテン語 *alauda*

動機付け *motivation* を失ったもの

例：toilette「身支度、化粧、洗面」＜*toile*「平織りの布」

これらは、辞書の見出し語も別になっており、もう一度整理しなおすべきものであるため、ここで扱う指小辞という範疇には加えないこととする。

1.3. 指小辞の歴史的背景と種類⁷⁾

指小接尾辞の多くは、ラテン語の語尾に由来する。

例：仏語 *-eau* / *-elle* の起源となった *-ellus*

lupus「狼」の指小辞 *lupellus*「小さい狼」に於ける接尾辞

また、ラテン語の段階では、普通の派生接尾辞だったものもある。

例：仏語 *-in-ine* の起源となった *-inus*

lupus「狼」＞*lupinus*「狼の」

ラテン語の段階で変意辞だったものは、ロマンス語にこれが引き継がれている場合もあれば、そうでない場合もある。

仏語の指小接尾辞としては *-et(te)* が支配的で、他の接尾辞の使用は稀である。従って以下の網羅的リストは、アルファベット順に示す。由来の参考の為、語源も付記する。複合形は省略し、本論で扱う *-ot(te)* と特に関係が深い、*-et(te)* は、§2. で述べる。

1.3.1. *-eau*（古形 *-el*）女性形 *-elle*

ラテン語 *-ellus* に由来。*-et(te)* が支配的な仏語変意接尾辞の中で、辛うじて生産性を保つ。単純語が女性形の場合は性が変わることが多いため、

女性形は殆ど生産力を持たない。

例：baleineau「鯨の子」<baleine「鯨」

lionceau「ライオンの子」<lion, lionne「ライオン」(伊語
leoncello <leone)

serpenteau「小さい蛇」<serpent「蛇」(伊語serpentello「小さい
蛇、悪戯っ子」<serpente「蛇」)

1.3.2. -ille

ラテン語-ellus 接尾辞の変異体である指小接尾辞-illusに由来。

女性名詞語尾「小さなもの、...に似たもの」を表す指小辞。

例：brindille「小枝」<brin「枝」

男性形は、方言または中世の形-iau。俗語としても稀に見られる。

例：morvieu = morveux「洩、洩垂れ小僧」<morve「洩」

nobliau「小貴族、または貴族であることが疑わしい貴族」
<noble「貴族」

1.3.3. -in -ine

語源的に-in-ine は、ラテン語-inu(m)に由来する。-inumは、「...の性質を持つ、に関する、に似た」の意で様態・属性を示す名詞派生形容詞を作る力を持っていた。この働きは、“形容詞・名詞語尾で、名詞付加の-in,-ine”にもよく保持されている。指小接尾辞としての-in-ineは、名詞について、縮小・軽蔑を表す。

例：tableautin「小さな絵」<tableau「絵」

1.3.4. -ol/-ole

ラテン語-éolus か、または-iolus に由来する。翻訳借用のことが殆ど。

例：casserole「片手鍋」<イタリア語cazzaruola

bestiole「小動物」<ラテン語bestiola (bestia「獣」の指小辞)
(bte「獣」)

1.3.5. -on

ラテン語 -o, -onem に由来。その小ささでもって目を引くものを示す。

- a. イタリア語やスペイン語からの借用や模倣によって得られた、拡大接尾辞としての -on が現れる例もある。

例: ballon 「大きなボール」 < 北部イタリア方言 ballone

(= 標準語 pallone 「ボール、気球」) < palla 「ボール」

barbon 「年寄り」 < 伊語 barbone 「浮浪者; 濃い (長い) ひげ」 < barba 「ひげ」

- b. 小ささが目立つもの。かつて最も生産性の高かった「動物の子」の意。

例: chaton 「子猫」 < chat 「猫」、

caneton 「アヒル、鴨の子」 < canette 「雌アヒル (鴨) の雛、子鴨」 < cane 「雌アヒル (鴨)」 < canard 「アヒル、鴨」

- c. さらに小ささが強調されるもの。「部分」の意。

例: chanon 「鎖の環」 < chane 「鎖」

1.3.6. -ule

ラテン語 -ulus に由来。民衆経路によるものではない。

1. 借用語の語尾が殆どで、

例: 仏語 formule 「定型、書式、申込書」

< ラテン語 (指小辞) formula 「規則、規範、手続き」

< forma 「姿、外観、型」

名詞語幹に付く接尾辞として仏語に入ってから作った新語は、僅かである。

2. この接尾辞がラテン語語基に付加されたもの

例: 仏語 ovule 「生物卵子、植物胚珠」

< ラテン語 ovum 「卵、卵型のもの」

3. この接尾辞が仏語語基に付加されたもの

例: antenule 「小触覚: 甲殻類の二対の触覚のうち前方の一对」

< antenne 「アンテナ、節足動物の触覚」

< ラテン語 antenna 「(船の) 帆桁」

現在はまだ生産性がない。

(ラテン語から民衆経路で仏語に入ったものは、-ellus型接尾辞に由来する)

これら変意接尾辞は、現在殆ど生産性を持たない。これらの接尾辞をとった変意辞で、仏語語彙に留まっているものの殆どは、語彙化している。

2. フランス語指小辞-ot(te)

2.1. フランス語-ot(te)の価値

仏語-ot(te)との比較のために、同語源のイタリア語接尾辞-ottoについて述べておく。

2.1.1. イタリア語-otto⁸⁾

この接尾辞の付加する基本概念は「若い」だと考えられる。

-ottoは、-ettoの変異体の一つという説もあるが、「親愛・指小」の-ettoとの明らかな意味の違い(イタリア語-ettoは、基本概念が「縮小」であり、「拡大」は不可能

例：vocetta「小さな声」<voce「声」

ometto「坊や」<uomo「男」、vasetto「小壺」<vaso「壺・容器」)

を考えると、-o-で始まる接尾辞は殆ど接尾辞-olusしか見つかっていないのだが、俗ラテン語の段階に*-ottusをたてるべきだとする説[MEYER]-LÜBKE[NYROP]がもっともだろう。

イタリア語-ottoは、もともとが

- a. 「動物の若いもの」を示すための接尾辞である。

例: aquilotto 「若鷹」 < aquila 「鷲、鷹」

passerotto 「子雀、」 < passero 「雀」

(それが人間に拡大されて)

contadinotto 「百姓の若者」 < contadino 「農民」

- b. 「若い」という概念は「小さい」につながって「縮小」概念を付加するようになり

例: leprotto 「小うさぎ」 < lepre 「うさぎ」

signorotto 「小さな領地の主」 < signore 「領主」

isolotto 「小さな島」 < isola 「島」

contadinotto 「小さい農夫」 < contadino 「農民」

- c. また「逞しい」につながって「拡大」概念も付加する。

例: giovanotto 「逞しい若者」 < giovane 「若者」

contadinotto 「逞しい・若い農民」 < contadino 「農民」

signorotto 「大きな紳士」 < signore 「紳士、領主」

leprotto 「可愛いまるまるしたうさぎ」

(DARDANO は「+人」のときは 中性的意味の派生語を作る」と定義しているが、この例からは賛成し難い)

- d. 「縮小」の概念は更に、形容詞の意味の「緩和」につながる。

例: anzianotto 「初老の」 < anziano 「老いた」

bassotto 「ちょっと低い」 < basso 「低い」

grasotto 「小太りの」 < grasso 「太った」

- e. 「逞しさ」は「拡大」につながる。

例: pienotto 「はちきれそうな、ふくよかな」 < pieno 「豊富な」

sempliciotto 「単純すぎる奴」 < semplice 「純真な人」

grasotto 「まるまる太った」

2.1.2. 仏語-ot(te)

前世紀まで、かなりの生産性を持っていた。[NYROP]

こちらもイタリア語-ottoと同じく *-ottus に由来すると考えられるが、[NYROP] や [THIELE]⁹⁾ を見るかぎり、その用法は、イタリア語-otto に

比べると、かなり限られているように思われる。

b' 指小接尾辞として名詞・形容詞につく（時に貶下）

例：bêchot (= bêchet) 「小さな鋤、シャベル」 < bêche 「鋤」

îlot 「小島」 < île 「島」

frerot 「弟」 < frere 「兄弟」

「小さい」から「下位概念」を示し、「属性・類似」

例：boulot 「太くて短い棒パン」 < boule 「球、丸パン」

culotte 「半ズボン」 < cul 「尻」

d' 「縮小」の概念は更に、形容詞の意味の「緩和」につながる。

例：maigriot 「痩せぎすの」(変異体 -iot) < maigre 「痩せた」

vieillot 「年寄りじみた」 < vieux 「年寄り」

この他に、動詞の語幹について「行為」と「行為の結果」を表す派生語を作るが、本論では省略する。

指小辞 -ot(te) と紛らわしいものでは、類推から -o, -oc, -oe, -og, -ol, -out などでは終わる幾つかの単語にとって変わった -ot(te) 語尾の語がある。

例：escargot 「エスカルゴ」 < プロバンス語 escar(a)gol

書記法上の変異体も多い。

例：cheminot < chemineau 「シュミノ：西フランスのドーナツ型パン菓子」

職業名の語尾 -o と -ot 語尾が混同される例もある。

例：traminot 「路面電車 tram(way) の従業員」 cheminot 「鉄道員」
に倣う。

名詞・形容詞短縮形の接尾辞 -o などとの混同の例。

例：bachot = bachelier 「バカロレア」

これで明かなように、「縮小」以外の概念、すなわちイタリア語 -otto の意味範囲の内 a., c., e. を表したものが存在しない。

だが、本当に、仏語指小接尾辞 -ot(te) は、-et(te) の変異体としての意味しか持っていないのだろうか。仏語指小接尾辞 -et(te) の機能をまとめてみる。

2.1.3. 仏語-et, -ette⁽¹⁰⁾

語源不詳である。いずれにせよ、ラテン語でない古い親愛辞の形に遡ることになるらしい。イタリア南部に於ける -etto 系列の欠落と、仏語 -et(te)の支配的普及は、この接尾辞の北部起源説の主要な根拠になっている。[ROHLFS]

この-et(te)は、-illus からの音韻変化の-eau/-elle を凌駕する指小接尾辞である。無音のtの存在感が薄いことから、男性形に付く場合も女性形語尾の-etteをとることがある。

変意接尾辞として名詞・形容詞につくもの。

例：maisonnette「小さな家、メゾネット」<maison「家」

chosette「どうということはないもの」<chose「もの」

「小さい」ことから「下位概念」を示し、「属性・類似」を表すもの。

例：croisette「小さい十字架、ヤエムグラ、リンドウ」<croix「十字架」

couette「(もともとは) 小さな尾、髪束」<cou = queue「尻尾」

jeunet「ごく若い」<jeune「若い」

propret「こぎれい」<propre「清潔」

-ot(te)と同じく、この他に動詞の語幹について「行為」と「行為の結果」を表す派生語を作る。このように機能の点からだけ見ると、[HASSELROT]の分類のように-ot(te)は、-et(te)の変異体と考えることも出来る。[HASSELTOT] リストの-et(te)指小辞の数388(単純語が同じで性が異なるものは一つと数えた)に対し、-ot(te)指小辞の数は、僅か16であり、完全に-et(te)が-ot(te)を凌駕している。では、いかなる時に-otが現れるのだろうか。

2.2. [HASSELROT] による -ot(te) 実詞指小辞のリストの分析

[HASSELROT]の指小辞リストは、原則的に petit + N. という連辞で分

析的に表すことができる指小辞を網羅している。(Larousse du X X e siècleにも Grand Larousse Encyclopdique にも存在しない形は、以下なしと略し、Grand Larousse Encyclopdique からは削除された形は削除と略す)

その中で、-ot(te) が -et(te) の変異体と考えることも出来るのは、以下に示す例においてである。

a. 語末の e と男性形接尾辞 -et の最初の -e- が混同されるのを避けるための -ot(te). angelot 「(宗教画などにある) 子供の天使、小天使」 < ange 「天使」

「小さい天使」のみを表すわけではなく、普通の「天使 ange」を言い換える場合にも用いられる。angelet (1914) 「天使のような子供、天使」が存在するが、稀にしか現れない。

bêchot (= bêchette) 「小さな鋤、シャベル」 < bêche 「鋤」
性が変わっているということは、只の bêche の縮小ではなく「鋤に似たもの」という派生語に近い意味になっている可能性がある。⁽⁴¹⁾ bêchette が間違いなく「小型の鋤」を指示するのに対し、bêchot は、「シャベル」のような、かなり異なる対象を示しうる。*bechet という形はない。

îlot 「小島、孤立した家々の小群」 < île 「島」

îlet 「古小島」より頻度が優勢である。性が変わっているということは、只の île の縮小ではなく「島に似たもの」という派生語に近い意味になっている可能性がある。île と同じ女性名詞の îlette 「稀すこし小さめの島」が存在する。同じ単純語・同じ接尾辞からできた指小辞で性の対立がある場合、女性形の方が少し大きめの対象を示し得るという報告がある。

[MAIKIEL]

merlot 「ツグミの雛」 < merle 「ツグミ」

*merlet はない。merlot は、merleau の書記法上の変異体。

merlelot 「小さいツグミの雛」 < merlot

cf. merlerette < merlette 「稀ツグミの雌」は、存在する。

a'. 同じ母音の重なりを避けるための -ot(te)。

frrot 「弟」 < frre 「兄弟」

*frr(e)et という形はない。

gosserot 「子供」 < gosse 「子供、若者」

*goss(e)et という形はない。cf. gosselin(e) 「少年、少女、愛人」

viergelotte なし < vierge 「処女、乙女」

語幹が違う virginette, virgineton, virginalette という様々な指小辞のうち、接辞をとることで、vierge からの変意を可能にしたものである。

*viereg(e)ette という形は、母音衝突が起こるため避けられる。

b. -et(te) 接尾辞による派生語と指小辞を区別するための -ot(te)。

bécot 「(口語) 軽いキス」 < bec 「嘴、口、(スイス) 軽いキス」

becquet 「(作者による) 台詞の追加、岩の支点」 (< becqueter 「嘴でつつく、ついばむ」 < bec) という -et による動詞派生語との混同を避けるため。

feuillotte なし 「若葉、小さな葉」 < feuille 「葉」

feuillette 「小さな葉」には、「酒樽、酒をはかる単位フワイエット」という意味があるので、混同を避けるため。

c. その他の -ot(te)

soleillot なし ロシア語指小辞 solnychko の翻訳語 < soleil

性は変わるが La Soleillette という村があることから、-et(te) がとれないわけではないことがわかっている。

以上の分類は、a. にまとめた指小辞のように -ot(te) 語尾しかとれないものであり、-et(te) 変異体としての -ot(te) の機能を裏付けているかに見える。ところが、以下に示す例においては、-ot(te) を -et(te) の変異体と考えることが難しい。

つまり、-et(te) 接尾辞による指小辞とニュアンスを変えた、貶下あるいは遊びの含意の大きい指小辞をつくるための -ot(te) の例である。

- d. 語基を同じくする-et(te)指小辞と-ot(te)指小辞とが同時に存在するもの。

damotte 「femme mariée de condition modeste 質素な生活の既婚婦人」
<dame 「婦人」

親愛 - 縮小の表現である damette なしより劣る、或いはただ単に異なる意味を持たせるため。隠語で damoche というイタリア語起源の接尾辞を持つ形がある。

villotte 「削除」 「小さな町、村」 <ville 「町、都市、都会」

cf. villette 「削除」 「稀」 都市近郊の小さな町」

- d'. 指小の意味が殆どないもの。

lapinot 「(地方) 兎」 [なし] <lapin 「兎」

動物を示す例。「ウサ公」という感じであり、子兎を指すわけではない。

*lapinet という形はない。

paysannot [なし] ガスコーニュ方言 <paysan 「農民」

*paysannet なし。

rabbिनot [なし] <rabbिन 「ユダヤ教シナゴグの祭司、ユダヤの律法博士」

例文では「カトリック要理にのっとって」という記述があるので、「先生」。

《youpinot》 [なし] 「小さいユダヤ人、けちなユダ公」 <youpin(e)

「(卑しめて) ユダヤ人」

*youpinet なし。

-et(te) 変異体としてしか -ot(te) が存在しないのなら、ここに範疇化した -ot(te) 指小辞が -et(te) で置き換えられないはずはない。語彙化したものの例には、

cageot 「(傷みやすい野菜や果物、家禽などを運ぶ) かご」 <cage
「檻、かご」

(cagette 「(野菜、花などを運ぶ) 小さなかご」 (1928)) と同じ内容を示

しうる)

cf. caget 「(チーズの水切り、熟成に用いる) 小さな簀の子」(1922)

cuisse 「(鹿、猪などの) 腿肉、鎧の腿あて」 < cuisse 「腿、腿肉」

cf. cuissettes 「(スポーツ用の) ショートパンツ、トランクス」(20C.)

中期フランス語の diabolot 「小悪魔」 < diable 「悪魔」

goulot 「(俗語で) 口、瓶、水差し、漏斗等の口」 < 古フランス語

goule 「口、動物の口」

cf. goulet 「狭い港または湾の口、古瓶、水差し、漏斗等の口」

があるが、-ot(te) 指小辞の方が俗語的含意を多く持ち、ここでも -ot(te) 指小辞と -et(te) 指小辞との意味の対立が伺われる。以上の例には、-et(te) の使用を抑制する母音の制約なども見つからないことから、-ot(te) の付加含意が -et(te) のそれと異なることが裏付けられる。

3. 結 論

仏語 -ot(te) 付加の指小辞が現れるのは、§2.3. にまとめたように音韻的に -et(te) が付加しにくい場合と、-et(te) による派生語と指小辞を区別する必要がある場合、また -et(te) 付加の指小辞より貶下の意味合いが強めの指小辞を作る場合である。

仏語 -ot(te) は -et(te) の変異体として機能する。しかし、僅かだが、-et(te) との意味の対立 (強めの貶下の含意) は存在している。前世紀まで、かなりの生産性があったのも、-et(te) との意味の対立があった証拠である。-et(te) 変異体としてしか -ot(te) が存在しないのなら、d に分類した -ot(te) 指小辞が -et(te) で置き換えられないはずはない。この例には、-et(te) の使用を抑制する母音の制約なども見つからないからである。-ot(te) 指小辞の方が俗語的含意を多く含むというのが、-et(te) 指小辞との意味の差だと考えられる。にもかかわらず、現在 -ot(te) に生産性が殆どな

いのは、-et(te)との意味の差が感じられなくなっていることを示している。-et(te)との価値が同じだと考えられるようになったことから、指小辞を作る際 -et(te) 音韻的に付加しにくい場合でも、その接辞付加の変異体 -elet(te), -onnet(te), -eret(te) などが、-ot(te) より優先的に用いられるためである。

類推から -o, -oc, -oe, -og, -ol, -out などと終わる幾つかの単語にとって変わった -ot(te) 語尾の語との混同を避けるためにも、今後、指小接尾辞 -ot(te) の生産性は、ますますなくなっていくと思われる。

【注】

- (1) DARDANO, Maurizio : *La Formazione delle parole nell'italiano di oggi - primi materiali e proposte*-, Bulzoni, Roma, 1978
(以下 [DARDANO] と略す) §2.8.2.1.
- (2) WEBER, Marcel : *Contribution à l'étude du diminutif en français moderne - Essai de systématisation*-, Imprimerie Otto Altorfer + Co. Zurich, 1963 (以下 [WEBER] と略す)
- (3) [WEBER] pp. 10-12
- (4) DUBOIS, Jean : *Etude sur la dérivation suffixale en français moderne et contemporain*, Librairie Larousse, Paris, 1962 (以下 DUBOIS と略す) p.6
- (5) WARTBURG, Walther von / Traduction de Pierre MAILLARD : *Dérivation, in Problèmes et méthodes de la linguistique*, Presses Universitaires de France, Paris, 1969, (以下 [WARTBURG] と略す) p.126
- (6) HASSELROT, Bengt : *Etude sur la vitalité de la formation diminutive française au X^e et XI^e siècles*, Almqvist & Wiksells, Uppsala, 1972 (以下 [HASSELROT] と略す) p.103
- (7) MEYER-LÜBKE, Wilhelm Traduction d'Auguste et Georges DOUTREPON-
T : *Grammaire des Langues Romanes II MORPHOLOGIE*, 原著 Paris, Welter, 1895, (Slatkine Reprints Genève, 1974) (以下 [MEYER-LÜBKE] と略す),

NYROP, Kristoffer : *Grammaire historique de la langue française III*, Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag, Copenhagen, 1936 (以下[NYROP]と略す)、

ROHLFS, Gerhard / Traduzione di Salvatore Persichino : *Grammatica storica della lingua italiana e i suoi dialetti, III Sintassi e formazione delle parole*, Einaudi, Torino, 1969 (以下[ROHLFS]と略す)を参照した。

(8) [DARDANO] §2.8.2.2.8、[MEYER-LÜBKE] §§ 505, 508、[NYROP] §§287-291 [ROHLFS] §1143

(9) THIELE, Johannes Traduction de André Clas : *La formation des mots en français moderne*, Les Presses de l'Université de Montreal, 1987 (以下[THIELE]と略す)

(10) [DARDANO] §2.8.2.2.2、[MEYER-LÜBKE] §§505, 507、[NYROP] §§220-224、[ROHLFS] §1141

(11) MALKIEL, Yakov : *Gender, sex, and size, as reflected in the romances languages*, in *From particular to general linguistics, selected essays 1965-1978*, John Benjamins publishing company, Philadelphia, 1983, pp.157-175 (以下[MALKIEL]と略す)を参照した。

【使用した辞書】

DUBOIS, Jean -GUESPIN, Louis -GIACOMO, Mathée -MARCELLESI, Christiane -MARCELLESI, Jean-Baptiste -MEVEL, Jean-Pierre : *Dictionnaire de linguistique*, Larousse, Paris, 1991

[訳本：伊藤晃・木下光一・福井芳男・丸山圭三郎・泉邦寿・小野正敦・戸村幸一編：『ラールス言語学用語辞典』、大修館書店、1980 尚、仏語は改訂版]

小学館ロベール仏和大辞典編集委員会 編集：

『小学館ロベール仏和大辞典』、小学館、1988

池田廉 他 編：『小学館伊和中辞典』、小学館、1983

田中秀夫 編：『研究社 羅和辞典』、研究社、1982